

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 76

学校名・団体名	松阪市立東黒部小学校
HPアドレス	http://www.mctv.ne.jp/~higas2es/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	子どもの命を守れ～地域と連携した安全・防災教育～

〈活動・研究の意義、目的〉

①地域との交流を通してつながりをつくる。

地域から多くの講師を招聘して、知識や技術を得たり、生き方を学んだりする。また、地域の様々な活動をともしにする。このなかで、優しさ、知恵、技術の素晴らしさ、忍耐、礼儀など、失ってはいけない大切なことが、子どもたちに確実に伝えられる。また、高齢の方だけでなくたくさんの地域の方との交流をすすめる、信頼関係を構築する。

②子どもを中心にして地域にくらす人々の命を守る。

避難訓練に加えて、地域の安全マップを作成し、それに基づき、安全なまちづくりをすすめる。保護者や地域住民と連携しながら、啓発活動も行う。また、集会を通して、児童・保護者だけではなく、地域のみんなで共有する。

1 活動内容

(1) 地域安全マップづくり

6月17日(土)



児童と保護者、地域住民、教職員、行政が連携して、交通安全・防犯・防災の視点で、学校周辺の危険箇所について考える機会「地域ふれあいタウンウォッチング」を行った。事前に何度か準備会を設け、当日は3年生から6年生までの児童を含め45人が3つのコースに分かれ校区内を歩いて見て回った。見通しの悪い交差点、大雨の時あふれそうな水路、暗くて人通りの少ないところ等「危険な場所」や海拔表示や消火栓などの「役に立つもの」などを確認し、記録した。その後、学校に戻り「地域安全マップ」づくりに取り組み、学習の成果を発表し合った。この安全マップは校内に掲示し、来校する保護者や地域の方にも見ていただいた。

1月下旬、6年生の児童が校舎内の廊下の白線が薄くなっていることに気づき「自分たちの力でペンキを塗って、みんなが安全に行動できるようにしよう」と、ペンキ塗りに挑戦した。白線に沿ってマスキングテープを貼り、ペンキを塗り、乾くのを待った。休み時間や学級の時間などを使い、校舎全体の3分の2にあたる部分を1週間程度かけて少しずつ塗り替えていった。「校舎内を走らずに落ち着いて歩くことで、普段からけがをしないように気をつけよう」と、児童会を中心に呼びかけた。



(2) 東北先進地視察

10月27日、28日

多くの命と歴史や文化の証を失った東日本大震災。その東北地域を視察し、実際の目で見て肌で感じて、復興の経過、避難のあり方、今後の課題、そして再認識した先人から伝えられてきた遺訓の大切さなどに学びたいと考えた。時間が経過しても決して忘れてはいけないことである。そこで、職員2名が視察に東北を訪ねた。語り部の方の話を伺いながら、胸をつまらせながら震災遺構を見つめたと言う。研修会で環流した後、文化祭でも特設コーナーを設け、地域の方々にも紹介した。



(3) 命の尊さを考える取り組み 通年

4月14日(土)児童引き渡し訓練を行った。地震や津波、大雨などの自然災害、または不審者等による緊急事態で児童の迎えを協力いただくものである。現実にこのようなことがあっては大変だが、訓練を重ねて普段から緊急時にそなえている。また、避難訓練は、年間3回以上定期的に行っている。本校は海岸から1kmと近い位置に有る。地震が起きると津波が来ることが想定される。11月1日の訓練では、まず身を守る行動をとり、揺れがおさまったら運動場に避難する。その後津波を想定して非常階段を使って屋上に上がり、ライフジャケットをつけて待機するというものである。今年度は起震車体験も行った。全員が体験したが、6年生が体験した震度6は近くで見ているものにまですごさが伝わり、地震の恐ろしさを実感させられた。



子どもたちが地域の一人暮らしのお年寄りに月一回手紙を書いている。福祉文通というこの取り組みはもう20年以上続けている活動である。各月で担当学年を決めるので、1年に3・4回だが、6年間書き続けていく長い取り組みである。子どもたちは主にその季節のことや学校の様子を中心に、思い思いの内容を考え手紙という形で文章を綴る。「交通事故に遭わないように気をつけてください。」「学校は津波の時に避難場所になっています。」など、地域のお年寄りの顔を思い浮かべながら一生懸命に綴り続けている。

2 成果

本校は、これまで構築してきた地域とのつながりを大切にしながら、協働して「子どもの命を守る」という視点で教育活動を展開できていることが強みである。本校の子どもたちは、命の尊さを考え、家族や地域の方を大切に思い、地域の中で輝いている。このことは、子どもたちの学びを深めると同時に、地域に元気を与えることにもつながり、今後も安全・防災教育の意識を高めていけると考えている。